

再非行少年とその保護者に必要な支援と介入のタイミング

○ 日本福祉大学 湯原悦子 (003745)

キーワード：再非行、保護者、支援

1. 研究目的

2016年12月に「再犯の防止等の推進に関する法律」が施行され、再非行防止に関する世間の関心は高まりつつある。非行件数は減少傾向にあるが再非行少年率は年々上昇しており、今や非行少年の立ち直りに向けた施策の充実や研究の進展は喫緊の政策課題と言えよう。先行研究においては、非行少年を取り巻く環境、少年とその保護者の意識の変化等について調査を行い、非行からの立ち直りに寄与あるいは阻害する要因を明らかにすることの必要性が指摘されている。

非行少年の保護者に関しては、以前から非行からの立ち直りへの寄与要因としての影響力に注目がなされてきた。保護者自身も、子どもの非行に悩み苦しんでいることが多く、支援が必要な存在である。しかし研究において、非行少年の保護者は少年とは別に調査がなされることが多く、調査結果が少年の調査と結合されないため、非行の始まりから更生に至るプロセスにおいて、少年とその保護者がお互いどのような経験をし、いかなる気持ちを抱えていたのか、双方に対し、誰によるどのような支援が必要だったのかを確認することはできない。

そこで本研究では、再非行経験のある少年とその保護者を対象に、再非行から更生に至るプロセスにおける心情を聞き取り、少年と保護者それぞれに必要な支援内容と介入のタイミングについて確認することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

調査対象は再非行防止をミッションに掲げる NPO 団体 A が支援する少年とその保護者である。NPO 団体 A は非行経験がある者となない者が組み、逮捕後から一貫して同じ支援者が支援を行うなど先駆的な活動を行っている団体である。今回は NPO 団体 A の理事長を通し、再非行経験を有する少年とその保護者 1 組の協力を得、質的調査を行った。調査方法：少年と保護者それぞれに個別インタビューを行い、再非行から更生に至るまでのプロセスにおける心情について確認する。分析方法：インタビュー結果を逐語録に起こし、少年と保護者それぞれが直面した困難や悩みを抽出し、再非行をしていた時期、逮捕から少年院在院期、社会での生活を始めた時期など、時期区分ごとに整理を行い、必要な支援と介入のタイミングについて考察する。

3. 倫理的配慮

本研究は日本福祉大学の研究ガイドラインに沿って実施した。調査対象者には研究目的

と質問項目を説明し、インタビュー結果を学会や論文などで発表することに口頭で合意を得た。分析にあたっては匿名とし、個人が特定される内容は分析から省いた。

4. 研究結果

●少年：元暴走族メンバー。集団暴走等で逮捕、2回の少年院経験がある。

再非行をしていた時期：一度目の少年院を出た後、幼馴染で真面目な友達と付き合いをしていたが物足りなくなり、不良仲間と付き合うようになった。そして「ここが俺の居場所だ」と思うようになった。暴力団関係者や年上の窃盗団との関係もあり、暴力団に誘われた。暴走族や暴力団の世界に惹かれ、裏社会でトップを目指すことに魅力を感じた。

逮捕から少年院在院期：逮捕時は出院したら暴走族に戻り、引退式を行った後チームを解散しようと考えていた。今は非行をすることしか考えられない。入院前に働いていた職場に戻り、今まで迷惑を掛けてきた母親を幸せにしたいという思いもある。

●保護者：少年が小さい時、夫と別居。女手一つで少年を育てあげた。

再非行をしていた時期：1回目に少年院に入っていた時はたくましくなったと感じ、安心していた。しかし退院後、アルバイトできるところがなく、しばらく家にいた。しだいに夜遊びを始め、朝帰って来るようになったが自分は家から出て行ってしまうことを心配し、何も言わなかった。ここで何か言ったら状況はもっと悪くなるし、言うこともきかないので放っておいた。当時はお互い関係が悪くなるのを避けていた。でも「ご飯食べたの」という声掛けはしていた。一人でどうしようと悩んでストレスがたまった。

逮捕から少年院在院期：もともとうつ症状があったが、もっとひどくなった。ただ逮捕されたことで気持ちは落ち着いた。息子が少年院に入り、とても寂しい。面会から帰ると涙が出てくる。なんでこうなってしまったのだろう。父親がいたらここまで悪くならなかったかも。息子とはずっと2人で暮らしてきた。今まで自分の好きにやってきた子だから、自分が何とかできるとは思えない。少年院に面会に行っても、反省の気持ちを感じない。

5. 考察

少年は少年院を出た後、居場所がなく不良仲間と過ごす時間、不良としてトップを目指すことに魅力を感じるようになった。出院後、就職や就学など、少年が社会で居場所を見つけるまでの集中的なサポートが不可欠である。保護者は少年院で更生したと考えるが、出院後に仕事が見つからず、夜遊びを始める息子に何と声をかけてよいのか分からず、一人で悩んでいた。この時に、少年院にいたときの姿と社会に戻ってきたときの姿にギャップが生じるのは普通であること、保護者の悩みを受け止め、どうしたらよいか共に考え、支え続ける支援が必要と考える。

参考文献：シャッド・マルナ著,津富宏ら監修, 翻訳 (2013)『犯罪からの離脱と「人生のやり直し」 -元犯罪者のナラティブから学ぶ-』明石書店